[一章　聖地侵入](file:///C:\Users\%E9%A2%9C%E5%BB%BA%E5%BF%A0\Documents\%E5%B0%8F%E8%AF%B4\%E5%A4%84%E5%88%91%E5%B0%91%E5%A5%B3%E6%97%A5%E6%96%87%E5%8E%9F%E7%89%88\(%E7%94%9F%E8%82%89)5%E5%87%A6%E5%88%91%E5%B0%91%E5%A5%B3%E3%81%AE%E7%94%9F%E3%81%8D%E3%82%8B%E9%81%93%EF%BC%88%E3%83%90%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%83%B3%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%89%EF%BC%89%EF%BC%95_%E2%80%95%E7%B4%84%E6%9D%9F%E3%81%AE%E5%9C%B0%E2%80%95_(GA%E6%96%87%E5%BA%AB%20-%20%E4%BD%90%E8%97%A4_%E7%9C%9F%E7%99%BB%20-%20%E5%89%AF%E6%9C%AC\OEBPS\text00011.html#toc-002)

　雨が降っていた。

　まだ地平線から日が昇り始めたばかりの時間帯。しどけなく雨を垂れ流す雲を突き破る陽光は薄く、朝もやと相まって視界が悪い。霧が糸を引いて落下しているような細い雨粒が体を らす中、神官の少女が黙々と歩いていた。

　雨よけの の下にある神官服の色は白。正式な神官の補佐に就いていることを示している。巡礼と修業を兼ねて、大陸各地を放浪する神官は多くいる。雨に濡れるのを防ぐために外套のフードを被っていることもあって、少女の着ているのが通常の神官服のままだったら、外見で個人を特定するのは難しかっただろう。

　だが彼女の神官服には特徴的なほど大胆な改造が施されていた。

　本来ならば清楚なつくりの神官服の 丈を太ももの半ば以上にぐいっと引き上げて、かわいらしさたっぷりのフリルに縫い直している。ミニスカートとなった神官服からすらりと伸びた健康的な太ももは、黒タイツで われている。こんな格好をしている となれば、大陸広しといえ一人しかいない。

　メノウの忠実なしもべを自称してはばからない神官補佐、モモである。

「……うっとうしい雨です」

　彼女は十四歳という年相応に幼い顔をちらりと上げて、雨を降らせる雲の様子をうかがう。

　昨夜から雲の流れが悪いと していたが、当たってほしくない予想ほど当たるものだ。夜明け前にはすでに白よりも黒寄りだった重い雲から、ため込まれた雨が吐き出され始めていた。

　徒歩の行程に、雨は試練である。

　石畳などで整備された街中とは違い、舗装のない地面は泥となって足元をぬかるませる。降りかかる雨粒は服をずぶぬれにして、容赦なく体温を奪っていく。体力的なことだけではない。降りしきる雨音は、周囲の気配を らわせてしまう。冒険者崩れの盗賊や魔物に魔導兵。危険度の高い敵対者の接近の察知が常より鈍ることになるのだ。

　雨天の行進の難易度は青天の比ではなくなる。

　文明なき未開拓領域に足を踏み入れる旅人の中に、たかが雨などと天候を侮る者はいない。

　多くの旅人が顔をしかめ、あるいは出立を見送ることもある天気でありながら、モモはこの雨を天恵だと えていた。

　降りしきる雨音は、人の気配を隠すのに打ってつけだ。身を隠すのに有利になるそれは、逃亡にも利点があることを意味する。

　モモは雨が降り始めると同時に を整え、雨音にまぎれて巡礼宿から出発した。

　この悪天候の中、あえて急ぐ理由も忍ぶ理由もモモにはあった。

　メノウと別行動を決めた山間の温泉街を出立して一人旅を始めてからずっと、聖地に向かうモモを付け回す悪質なストーカーがいるのだ。

「……ちッ！」

　追いかけてくる相手の顔が想起され、かわいらしい顔に似合わない激しい舌打ちが れる。

　文明の営みのない未開拓領域では犯罪を取り締まるための騎士がいないため、悪質な犯罪がのさばることも多い。 いにご禁制の物品が売り買いされる取引現場、禁忌魔導の研究に没頭する罪人など、国家領域では禁止されているありとあらゆる悪徳がはびこっている。

　たとえ禁忌に手を染める犯罪者であっても の神官にちょっかいをかけようという人間は少ない。むしろ後ろ暗い立場だからこそ取り締まる権利を持つ神官などは敬遠するのだが、何事にも例外に属する人間はいる。

　いまモモを付け回している人間など、その例外の筆頭だ。

「あれは、ほんっとうに……！」

　いらいらとした悪態が自然と口から漏れ出る。思い出すこと自体が精神衛生上よろしくないと頭を振って追跡者の顔を思考から追い出した。

　さっさと振り切ろうと夜間と雨天という強行軍に出たのだが、モモは数時間してすぐに追っ手の気配を野生の勘でとらえた。どうやら向こうも雨など気に留めずにいるらしい。ペースを落とさない強靭な肉体を持っている。

　このままでは追いつかれる。進行速度で自分が劣っていることを察したモモは、相手を め殺すための を巡らせる。

　ちらりと後ろを振り返る。

　雨をしみこませて泥となった道には、はっきりとモモの足跡が残っている。早朝の雨天とあってか、他の通行者もいないためによく目立った。追跡者も、これを見て追ってくるだろう。

　ならば相手の思考を逆手に取る。慎重に、自分の足跡に合わせながら後ろ足でバックをする。そうして、五十歩ほど。道のわきに、いい感じに雨を る木が生えていた。

「これでいいですねっと」

　モモはスカートのフリルに手を入れ、仕込んでいた糸鋸を取り出す。魔導の発動媒体になる紋章を刻んだ武器だ。

　モモは を振るう要領でワイヤーのようにしなる糸鋸を に生えている木の枝に みつけた。

　二度、三度引いて、自分の体重を支えられるか確認。多少しなるがぶら下がっても枝が折れることはないと判断して、慎重に体を浮かせる。そのまま腕の力だけでするすると登り樹木の上に到着した。

　途中、視線を落とす。足跡に乱れはない。成功だ。

「……んっ、さすがです、私」

　樹木の枝に乗ったモモは、自分が歩いていた道を注視する。

　残る足跡は自分のものだけだ。後ろに下がる時に自分の足跡と合わせてバックしたため、先を追えば途中で と足跡が消えたように見える。

　道に残る足跡は偽装工作だ。バックトラックと呼ばれる野生の動物ですら行う単純なかく乱技術だが、有効であるからこそ使われている。樹木に飛び移る時も足跡が乱れないように気を遣ったため見抜くのは難しいはずだ。

　このまま道を外れて別ルートを行くのも手だが、モモはあえてその場に潜んだ。

　追ってくる人物が途切れた足跡を見て戸惑う一瞬の を突いて、 る。

　追跡者から隠れるだけでは根本的な解決にならない。ここで仕留めてくれると意気込んでいた。

　モモは静かに殺意の を研ぐ。自分の殺気で感づかれるような はさらさない。糸よりも細く、刀剣よりも鋭い戦意で気配を隠しながら待機する。

　しばらくして、道に追跡者の影が現れた。早朝と雨天が組み合わさった薄暗さから人影の輪郭程度しか見えないが、体格からして間違いない。

　追跡者はモモの足跡に視線を落として歩いていた。隠れることを知らないと言わんばかりの堂々とした歩調だ。

　とうとう姿を現した相手に、モモは一層の緊張感を高める。かすかな息づかいすらも雨音にまぎれさせる。追跡者は優秀な猟犬だ。身じろぎの一つで気配が捉えられる恐れがある。

　モモが潜む樹木の横を通り過ぎた、と思った時だ。

　不意に、人影が足を止めた。

「ふむ」

　地面に視線を落としていた人影が、唐突にぐるんと顔を上げる。

「見つけたぞ、モモ」

　自信に満ちあふれた声は、口ぶりこそ男性的だが紛れもなく女性のものだった。彼女は腰に下げた大剣を引き抜く。十の紋章を刻んだ高度な導器である剣を迷いのない動きで地面に突き刺し、導力を流し込む。

『導力：接続──大剣・紋章──発動【爆炎】』

　紋章魔導の発動により、地面で爆炎が弾けた。

　威力は抑えていたのだろうが、地中で が起こった影響は小さくない。泥がはじけ飛んで舞い上がった。しかも魔導による爆発には指向性を持たせていたらしく、雨に濡れた泥はモモのいる樹上にピンポイントで飛来した。

　びしゃびしゃ、と水気たっぷりの音を立ててモモの全身に泥が降りかかる。

「少しばかり仕事が雑すぎないか？　いくら足跡を合わせても、二度も踏めば深さが変わるから見ればわかるぞ。モモにはもう少し工夫を期待していたんだがな」

「……やかましいです」

　勝手な期待をかけられて泥だらけにされるなど、 しいはずもない。モモは頰に付いた泥をぬぐいながら、 を吐き捨てんばかりの口調で答えた。

　雨で踏み直しの乱れがまぎれる可能性にかけていたのだ。そもそもこの薄暗いなかで差を見抜けるのもどうかしている。

　こうなれば隠れるのも無駄だ。泥まみれにされた ちを募らせながら枝から飛び降りたモモは、泥よりも粘度の高い視線を追跡者だった相手にぶつける。

　一目見て、女傑の部類だとわかる女だ。

　女性にしては長身ながら、威風堂々とした美貌に しい立ち姿には人を圧倒させるオーラがある。十代後半という少女が女性として完成していく の若々しさを全身から放っており、見る者に力強い印象を与えているのだろう。体の要所を隠すだけの独特なドレス姿は肌の露出が多いのに、不思議と下品さはなく気品を感じる着こなしだ。

　アーシュナ・グリザリカ。

　大陸東部の大国グリザリカ王国で出会ったお姫様は、とうとう西の最果てに近い聖地までついてきた。雨に濡れてもおとなしくなる様子がない しい髪質の金髪に、空の色をした を向けている。

　モモは白手袋に包まれた腕をずいっと突き出す。

「どーしてくれるんですかぁ？　姫ちゃまのせいで泥だらけになったんですけどぉ？」

「それは悪かったな。そのうちに詫びをするから、これからも末長く頼むぞ」

「……じゃーいいですよ。不問にしてあげますので、短いご縁ですませましょうねー？」

「おや、遠慮深いな。ではこれまで通りに頼むぞ、モモ」

　貸し借りなどつくってしまえば縁が生まれるから断ったというのに、直前の会話の流れなんてなんのそのと絡んでくる。そもそもアーシュナと縁をつなぎたくないモモの気持ちなどわかった上で、あえて曲解して な返事をするあたり、非常にアーシュナらしい会話の運びかただった。

「ていうか、姫ちゃまはなんで私のことを追いかけてくるんですか？」

「追いかけてくるとは、心外だな。そもそもモモの目的地はどこだ？」

「……聖地ですけど」

「だろう？　私もだ」

　アーシュナが胸に手を当て、堂々と偶然の一致だと言い切った。

「旅人が大陸西部に来れば、聖地を見に行くのなんて基本だ。というよりも、聖地に向かうために大陸西部に来ている割合が多い。有名な場所への行程がかぶるなんて巡礼の旅ならば普通に起こりえることで、それをもって追いかけた追いかけられたの扱いはやめてほしいな」

　反論の難しい を述べてから、きらりと っぽく目を光らせる。

「ちなみに私がモモを追いかける理由があるとすれば、逃げるモモを追いかけるのが楽しいからだな」

「じゃあもう追いついたからいいですね。私はしばらくここで雨宿りをするので、このまま追い抜いて先に行ってください」

「そう言うな。旅は道づれ、だろう？」

　冷たくあしらうも、アーシュナの とした態度は変わらない。寒々しい雨天にもかかわらず彼女の顔には日が差したような笑みが輝く。

「ま、冗談はさておき、だ。実に いことをしているのに、この私、アーシュナ・グリザリカが首を突っ込まないとでも思っているのか？」

　意思が弱ければあっという間に虜になってしまいそうなカリスマあふれるアーシュナの笑顔に照らされようと、モモのしらーっとした視線は変わりなかった。

　理由に高尚さも高貴さも もない、大迷惑もいいところな発言だ。振りきれなかった自分が悪いのだと言い聞かせて心を無理やり納得させる。

「もういいですよ……。スーパーウザ姫ちゃまでも、いざという時の使い捨ての にはなるでしょうし、肉壁として にいることを許してやります」

「うむ、 なら任せろ」

　赤みがかった金髪を翻し、実に頼もしい態度で胸を張る。

「相手の追撃を正面突破して、敵将の首をはね飛ばしてやるさ」

　どこまでも堂々とした受け答えに、モモはもう一度、ため息を吐いた。

　聖地は人類生息圏の最西端にある。

　海沿いにあるわけではないので大陸の大地はもう少し続いているのだが、聖地より先に国家領域はなく荒れ果てた未開拓領域が続くのみだ。大きな理由としては、文明維持に必要な地脈の流れが、聖地を終着点として折り返し、始点として循環する場所になっているからだ。

　大陸の大地に縦横無尽に張り巡らされている導力の流れ『地脈』。

　個人で扱うには膨大すぎる【力】も、人の集合体である都市を維持するためには欠かせないエネルギーだ。夜を照らす灯りを始めとしたライフラインの維持や、導力列車の運行など、地脈を源泉としたものが多い。国家領域では地脈に恵まれた場所に都市を建て、あふれでる導力を有用に活用するために日々試行錯誤している。

　その地脈の果てにして、人の居住区域のもっとも西に位置するのが聖地である。

　大陸最西部にある国家の国境を抜け、未開拓領域を歩いて、およそ三日で聖地にたどり着く。

　巡礼者が最後に歩くのは、聖地まで伸びているもっとも原始的な道だ。

　草葉に挟まれた道は、二人で横並びに歩ける幅だけ土がむき出しになっている。巡礼も終盤だが、ここから聖地まで続く道は人手を使って整備したわけではない。

　普通ならば町がつながる道は流通を円滑にするために行政が整えるが、聖地に限っては違う。

　ただ、人が歩いたから。

　山にある鳥獣の足跡が獣道になるように、巡礼の道は信徒が歩いた足跡を積み重ねてできた。

　十年、百年、千年。

　聖地へ向かうために歩いた名も知らぬ かたちの足跡が積み重なり、土を踏み固め、草木をおしのけ道となった。

　歩きやすいようにと石を敷き詰めたわけではない。誰かが開拓して整備をした道路でもない。土がむき出しの道は、もし人が通らなくなれば一つの季節が通り過ぎるだけで消え失せることが確信できるほどに、原始的な道だ。

　聖地に続く最後の巡礼路は、特別なことなしに人が歩くだけで道になるということを如実に示していた。

「メノウから話は聞いていたが、君たちの師匠『 』は列車で聖地に行ったんだろう？　聖地まで続く線路沿いに歩けば、だいぶ楽じゃないか？」

「列車ですかぁ？」

　 な信者ならば一歩一歩、感慨を みしめて歩く途上。信仰心をどこかに置き忘れて育った二人はもっと楽な道はないのかと罰当たりな会話をしていた。

　話題の種になっているのは、ここに来る前、山間の温泉街でメノウが聖地直通の列車を見たという話だ。

「そーとーうさん臭い列車ですよ、あれ。線路がどーやっても見つからないんですよね」

　聖地の周辺は、どこの国家にも属さない未開拓領域で囲まれている。そもそもの話、人類の文明の手が届かないから未開拓領域なのだ。線路など通していれば、それに沿って村落ができていて不思議ではない。

「修道院時代に聖地につながる路線があるっていう を聞いた時に、先輩と一緒に聖地をぐるっと回ってみましたけど聖地に入る線路はなかったんですよ。それなのに直行列車があるとか、明らかにおかしいじゃないですか」

「地上にないとはいえ、地下に線路をつくっている可能性もあるだろう。聖地といえば、大陸屈指の大動脈がつながっていることで有名だ。本来なら、もっと発展していい場所だぞ」

　石畳で整備された道ほどではないが、線路の上は歩きやすい。普通は線路の脇に道ができるものだがという問いは的を射ている。それでなくとも、導力列車の線路は地脈の上に敷かれるものだ。聖地には大陸を巡る地脈のなかでも屈指の大動脈がつながっているため、導力列車の線路が敷設されていてもおかしくないのだ。

　しかしアーシュナの疑問は、メノウが見たという列車がまともだったらの話だ。

「さあ？　聖なる地だから開発は進めていないっていうのが建前ですけど、実際はどうでしょうね。聖地周辺で穴掘りをするほど暇人じゃなかったので、それは知りません」

　恵まれた導力量により、常人よりも かに体力に余裕のある二人は進んでいく。朝方の雨が降りやみ、雲の切れ目から昼間の太陽が しをのぞかせ始めた頃。整備されていない荒地一辺倒の風景が変化する。

　明らかに人の手が入った田畑が目に入るようになってきた。

　多くの都市でも見られる風景だ。

　違いを挙げるとするならば、田畑を管理するのが の民ではなく修道服を着た女たちであるところだろう。白服の神官であるモモを見て、作業の手を止めて目礼する姿が見られた。

　周囲にある田園は、修道院が日々の糧を得るために耕している農園だ。他の都市周辺部と大差ないからこそ つ人の違いを、アーシュナは興味深そうに観察する。

「意外と普通の風景だな。モモも手を泥だらけにして農作業をしていた時期があると思うと、感慨深い」

「なに目線の感想ですかそれ……？　うちの修道院は墓地だったので、墓石磨きならせっせとしてましたよ。クソみたいな訓練の合間にある、いい休憩時間でした」

　 『 』は、名目上は の墓地を管理している修道院の院長だった。建前の役目であっても、命を育む田畑を管理するよりかはるかに に相応しい役目である。

「ん？　そうなのか。もしかしてモモやメノウが育った修道院も近くにあるのか？」

「ないですよ。私と先輩の出身は、聖地を挟んで向こう側にあります」

　モモたちが収容されたのは、処刑人を育てる の暗部である。人目を避けるために、出るにしても入るにしても聖地を通過しなければならない場所に建てられている。

　田園地帯を半分ほど進んだところで、二人は歩みを止める。

　物流の途絶えた には場違いなほど、美麗な町が見えた。

　大陸にある、あらゆる道の先の終着点。すべての道の始まりであり、すべての道の終わりでもある場所。大陸の地脈の巡りが始まり、終わりにたどり着く偉大なる導力の源泉地。

　聖地。

　名前を持たない都市に、城壁はない。未開拓領域にありながら、そこを襲うものなどいないから必要がない。あるいは他者の襲撃を恐れることなしという精神性が城壁を必要としなかった。

　だから、真っ先に目に入るのは巡礼者を迎え入れるためにある広場だ。

　誰をも拒むことなく迎え入れる列柱廊に囲まれた広場は、美しい正円を描いている。町の前半分を貫いて伸びる大通りは、遠目からも中心であるとわかる巨大な大聖堂に続く道だ。円形の広場に構えられている大聖堂の玄関口の脇には、双塔が並んで巡礼者を出迎えている。

　数ある教会施設は、大聖堂に従うように正対称に立ち並んでいた。民家に相当する建造物は一つもない。すべてが に関連した神官用の宗教施設だ。

　白一色。

　一辺五百メートルほどしかない小さな小さな町は、計算されつくした美しい教会建築様式によって編まれた町だった。

「あれか」

「ですね」

　立ち止まったアーシュナに、モモは く。

　世界に散らばる信仰のよりどころに相応しく、白く輝く れるほどに美しい町だ。一目見れば神聖であると感じ入り、見れば見るほど潔白であるということが伝わる。

　なにより特徴的で言葉を失うのは──その町を構成する建材すべてが、導力であるということだ。

「……」

　無言のアーシュナが、導力光の明かりに目を細める。

　聖地に来る人間は、誰もが一度ここで立ち止まる。美しさに感動し、達成感で打ち震え、神聖な街並みに見惚れる。だからここは、ほんの少しだけ道が太い。二人も数ある巡礼者の例にもれず、立ち止まって聖地の眺望を続ける。

　町の土台となる石畳から居並ぶ教会施設に円形の中央広場、シンボルとなっている大聖堂まですべてが導力光の を帯びる魔導で構成されている。

　千年前に滅び去った古代文明期に唯一残った町だとも言われている、現在の導力文明の始まりの地。

　人口、千人。

　正式に登録されている住民のすべてが の神官。

　巡礼で訪れる信者以外には、 はおろか すらいない。

　聖地と呼べば、ここを示す。この世に唯一無二だからこそ、名前すら付けられていない聖なる地だ。

　愛らしいほどに小さく、潔白なほどに清らかで、見るからに神秘的な町。敬虔な信者ならば、美しさに感涙して くこともある光景を前にして、アーシュナは悠然と胸をそらしたまま感想を く。

「一部に見覚えがあるな」

「はあ？　似ているものがないからこそ、聖地ですよ？」

　アーシュナは初めて聖地に来たはずだ。そもそも魔導でできている町に似ている場所などあるはずがない。

　モモの疑惑の目を前にして、アーシュナは確信をもって断言する。

「いや、間違いない。あの辺り、リベールの時にメノウが発動させた魔導と共通点がある」

　メノウが発動させた、教会式魔導結界。 を封印するために行使した術があった。

　規模こそ違うが、町の一部がメノウの発動させた教典魔導と酷似していると指摘する。

　 との戦いの時は毒を受けて治療を受けていたモモは、ああ、と頷く。

「そういえば先輩は地脈の導力を使えば独力で教会式結界をつくれましたね。派手なので に発動はさせませんけど……姫ちゃま、見る機会があったんですか？」

「うむ、あの時の戦いは心躍ったな」

　アーシュナがうっとりと目をつむる。熱っぽい吐息には、なまじ美人なだけあって変な色気があった。

「 の特殊性もあって、私の経験の中でもなかなか味わえない指折りの死闘だったな。死んでも復活する を封殺するために私が地脈を引き出して協力した。見事な魔導だったよ」

「先輩の武勇伝はまたあとで聞くとしますけど……確かに似たようなものですね。あれとはまた、魔導構築がだいぶ違うものになりますけど聖地も結界魔導の一種です」

　聖地として成立しているものと、メノウが個人で構築した結界とは規模が格段に違う。

　中心にある大聖堂を始点として、白く輝く市街の土台が丸ごと魔導で構築されているのだ。実物を初めて見たアーシュナは り声を上げる。

「つまり聖地は、大陸屈指の地脈を吸い上げて維持している、巨大にして上等な結界都市という理解で間違いないか？」

「ええ、ざっくりとそんな感じです」

　聖地の建造物の頑健さは、石づくりの一般的な町とは一線を画している。神官の末席にいるというのに散々なモモも大概だが、アーシュナもさして信仰心がないためか、感動よりも探究心が優っている様子だ。

　モモのさっぱりした論評に、アーシュナは大剣の柄に手を添える。

「あれほどの結界となると、壊しがいがありそうだ。いつか ってみたいものだな」

「……『 』のテロリストでも言いませんよ、そんなこと。私だって なんですから、目の前で犯行予告しないでください。普通にドン引きです」

　さすが、城を斬ったことのあるお姫様は言うことが違う。犯罪者予備軍の凶行に巻き込まれてはたまらないと、そそくさ距離を開ける。

「ていうか、姫ちゃまは騎士でしょーが。治安維持をする側がなにを言ってるんですか」

「はっはっは。よく考えろ、モモ。あんな怪しげなものを見て、調べたくならないほうが だろう？　これでも騎士としては優秀だという自負はある。不審な建物を見れば捜査したくなるのが性だ」

　一目見て、なにを見出したのか。アーシュナは嬉々として聖地を指さして持論を披露する。

「聖地が結界だと言ったな？　だがな、モモ。結界とは、なにかを守るために展開されるものだ。あんな巨大な結界で、一体なにを守っている？　まさか本気で『聖なる地を守っている』なんて言うなよ」

　 が掲げる大義を先回りで して、にやりと笑う。

　モモは返答に詰まる。聖地は現代文明の始まりの地だ。千年前、古代文明期が滅びる激動の時代にあって残った。そして聖職者である 、王侯貴族である 、市民階級である の三つの身分に分かれた現在の文明社会は、聖地から始まった。

「発生の順序が逆だ。聖地ができてから、 が生まれている。なにかを守るために展開された結界を、 の前身となった集団が『聖なる地である』として隠ぺいを始めたと考えるのが自然だ」

　ならば、なんのために聖地という巨大な結界がつくられたのか。

　祖国で世直し姫とも呼ばれたアーシュナは好奇心に声を弾ませる。

「ほら、存在自体が怪しげの塊だ。歴史的な を前にすれば、探究心がくすぐられる。 は、なにを隠しているんだ？」

「私は下っ端なので知りませんよ。絶対、  じゃないですか」

　聖地の維持をしているのは、中央にある大聖堂だ。そこに入れる神官は百人もいないとされる最重要区画である。聖地の内部に赴任している時点で の選りすぐりである証明だが、大聖堂の中にいるとなるとその上澄みだ。

　アーシュナがいくら怪しもうと、メノウの補佐官でしかない白服のモモが入るのは不可能だ。

「それはそれは。モモも なところがあると見える。かわいいじゃないか。手でもつなごうか？」

「ぶっ殺しますよ？」

　モモが殺気を飛ばす。アーシュナは、ふふっと笑い受け流した。

「この上なく人為的な都市なのだな、聖地とやらは」

「信仰なんてものが人為の結晶なんで、お似合いじゃないですか？」

　仮にも聖職者とは思えない発言を堂々と吐き捨てる。敬虔な信者がいれば、卒倒するか唾をまき散らしての説教が始まりそうな会話だ。

　大聖堂は魔導結界そのもののために、普通の建築物ならば必須の維持管理の人員すら不要である。玄関口の正門は常に閉ざされており、物理的な出入り口はない。儀式魔導陣で出入りをしているため、管理者の許可のない人間が入れる余地はない。

「町全体の建築様式の年代がごちゃまぜなのも気になるな。結界の大元を誰がつくったかは知らないが……時代的な統一性がないせいで、歴史的背景がまるでわからん」

「ずいぶんと細かいとこに気がつきますね。それこそ千年前の古代文明期から変わらない町なんですから、ここ千年の建築様式で考察するほうが変ですし……聖地に関しては『主』のお力で町全体を保っているとかいう 唾な話もありますけどね」

「それは信心深くて結構な話だが……現実的に考えて、古代文明の と考えたほうが妥当じゃないか？」

「古代遺物ですか？　それにしては規模が大きすぎるんですよね」

　古代遺物。

　人類絶頂期の古代文明期の遺産のことを指す単語だ。上は天の星々にまで至り、月に建造物を打ち建てたという高度な文明時代。ただ、千年以上前の文明の遺物なだけあって、完全に機能を保っているものは である。

「現代では再現不可能な効果を発揮するのが古代遺物の特徴じゃないか。千年前の超技術ならば、それこそ建材に導力を物質化したものを使っていてもおかしくはないと思うぞ？」

「そりゃそうですけど、素材から理論までが遺失技術なんですよ？　古代遺物を町の構築になんて使って想定外のことが起こったら、止めようもなく町が丸々消えるんです。いくら効果が大きいからって、メンテナンスもできないものを使わないと思いますけどね」

「それも一理あるな。……やはり、引きはがして中身を見たいものだが」

「そうなったら、私は迷わず姫ちゃまを捕まえますからね」

「それも一興、と言いたいところだが、一朝一夕で解ける謎でもなさそうだ。いっそ聖地を丸ごと消しさる方法でもあればいいのだが……」

「本当に捕まえてほしいんですか、姫ちゃま？」

　どうせ正解のないよもやま話である。未練がましい視線も割り切って、陰謀話は手じまいになった。

「それで、どうするんだ。向こうに到着してからの予定を聞かせてくれ。メノウも教えてくれなかったが、いろいろと悪だくみをしているのだろう？」

「悪だくみとは、人聞きが悪いですね。ただの帰省です」

　仲間でもなんでもないのに、どうして事細かに予定を教えなくてはいけないのか。さらりと聞き流す。

「そもそも姫ちゃま。いまから聖地に入ってどうするんですか。泊まれるとこありませんよ、あそこ」

「……ないのか？」

　意外そうに目を丸くする。未開拓領域にあるとはいえ、聖地を訪れる巡礼者は常に一定数存在するのだ。まさか宿泊施設がないとは思わなかったのだろう。

「ないです。 な話、なんにもないですよ、聖地って。ここからの眺めが一番の娯楽です」

「ふうん？　泊まれる場所がないなら、巡礼者は聖地を前にして野宿でもするのか？」

「しませんよ。私をなんだと思っているんですか？」

　モモは見せつけるために自分の服を引っ張る。おしゃれのために多少の改造はしてあるものの、正真正銘、 の神官補佐に与えられる白服だ。道中でアーシュナに泥をひっかぶらされたせいで薄汚れてしまったが、 の立場を証明することに不足はない。

「そこらへんにある適当な修道院に泊めてもらいます。巡礼中の神官の宿泊を拒む修道院なんてありませんからね」

　神官に限らず、多くの修道院は巡礼者の宿泊を受け入れている。聖地の手前に点在する修道院も、その例に漏れない。他の巡礼者ならば多少の金銭を寄付する必要があるものの、 ならば無料である。

「なるほど、周囲の田園部は聖地とは呼ばないんだな。あくまで結界都市になっている部分のみが聖地なのか。……モモは自分の出身の修道院には行かないのか？」

「あそこ聖地から微妙に遠いので不便なんですよね」

　モモたちが育った修道院は処刑人を育てるための場所だ。機密が多いために巡礼者の目に触れさせないようにと離れた場所に建てられている。さすがにアーシュナを引き連れるわけにもいかないと、適当な理由でごまかす。

「とりあえず、聖地に入るのは明日です」

　ここから見える聖地へと視線を向ける。

　モモはメノウの味方だ。メノウがどうであれ、モモは彼女の味方をする。モモの行動原理はそれ以上でもそれ以下でもない。

　メノウが 『 』に気がつかれないよう選んだ侵入方法に、モモが付いて行くことはできなかった。だからモモは、今回も別行動で聖地を目指している。

　つと目を閉じる。

　今回の件。事前の打ち合わせの時のメノウは、いままでにない状態だった。準備と打ち合わせの時点でいつになく張り詰め、緊張して、心を尖らせていた。

　しかたないとは思う。相手が、相手だ。

「無理を、しすぎないでくれるといいんですけど」

　モモの に浮かんだのは、ここ最近、いつもメノウの隣を歩いていた少女の顔だ。

　トキトウ・アカリ。本当ならばメノウが を裏切る事態になる前に、あの能天気な異世界人をモモが始末するつもりだった。

　でも結局、モモはアカリを殺すこともメノウを止めることもできなかった。

「……あいつのためにもなるっていうのは、ちょーっとばかり気に食わないですけど」

「ん？　どうした、モモ」

「なんでもないですっ」

　聞かせるつもりもないのに、知らずに独り言が漏れていた。機嫌悪く返答を打ち切る。

　尊敬する先輩と、ほんのひとつまみ分ぐらいは一緒に旅をしたアカリのために。

　モモは頭の中で予定を組み立てていた。

　聖地の中心。

　信仰のシンボルとして建つ大聖堂の外観は、巨大さと魔導で構成されているところを除けば世界各地によくある様式に則っている。

　まっすぐに長く伸びる身廊部と、十字に交差して広がる翼廊。交差点の奥にある礼拝堂を超えた尖塔の奥は、半円形の内陣部分へと続いている。正面入り口が最も堅牢かつ荘厳なつくりで、優に三階分の高さはある正面扉の両脇には、二つの尖塔が備え建てられている。

　双塔の片割れ、北棟のてっぺんにある部屋の窓辺に一人の少女が んでいた。

　日本から異世界であるこの地に来た『迷い人』、トキトウ・アカリ。

　童顔ながらもぱっちりとした瞳をした、見る者を ませる面立ちをしている年頃の女の子だ。うなじに絡みつくように伸ばされた黒髪はくせっ毛気味のようで、今日のような天気には湿度を吸ってふくらもうとするのを花飾りのついたカチューシャで押さえ込んである。

　 しげな雰囲気で窓の外を見る姿は、少女を少しだけ大人びて見せていた。

「あっちじゃ見れない町だよね。まさに異世界って感じ」

　ぽつりと された独り言は、普段のアカリと比べてひどくしっとりしていた。

　あっち、というのはアカリが元いた世界のことだ。

　夜になっても街並み自体が輝いている風景は、不夜城と称される地球の大都市の輝きとはまた印象が違った。目に優しく心穏やかになる光だ。

　町を構成するものすべてが導力光を放っているため電飾の灯りとも趣が異なる。白く輝く街区の周囲を、穏やかな田園地帯が囲っている。アカリが軟禁されている北塔は聖地の中でも最も高い位置にある。そのため街の切れ目まで遠望できた。

　街中を歩いているのは、藍色の神官服を着ている人間が圧倒的に多い。町の構造物が真っ白なため、彼女たちの服色はとても目に映える。

　他は補佐の白服と、逆に上位の司祭服。どちらの服も白いために背景にまぎれがちだ。修道服と巡礼者と思しき普通の服装がもっとも少ない。

「それにしても……」

　視線を室内に戻したアカリは、ぴっと人差し指を立てる。

　彼女の指先に導力の光が宿る。生命の魂から生まれる【力】──導力が集中することで起こる発光現象である導力光はあらゆる魔導発動の前兆だ。

　アカリが意識を集中させると同時に集まった光だったが、なんの現象を起こすこともなくほどなくして霧散した。

「むむむ」

　何度も繰り返した結果に、唇が る。

　アカリは異世界から召喚された迷い人。純粋概念と呼ばれる世界でも屈指の魔導を自在に れる。召喚と同時に強制的に魂へと付与された【時】の魔導は、いままでは呼吸するのと同じ自然さで行使できた。

　だというのに大聖堂に来てからずっと、魔導行使がままならない。

　まったく使えないというほどでもないのだが、ひどく発動しにくい上に、効果が大きく減じられている。発動する前に、なにかに阻害される感覚がある。いつもは無意識で構成できる部分でノイズが挟まり霧散する。

　総じて、とてもやりづらい。

「なんだろ、これ」

　魔導行使は めて腕を組む。ただでさえ発育のいい が強調されるが、どうせ一人だしと気にせず魔導がうまく使えない理由に思い悩む。

　純粋概念【時】。

　それが異世界に召喚されたアカリの魂に宿った、彼女独自の魔導だ。

　行使をするごとに記憶を失い、最悪に至ると人格を失って暴走する『 』になりかねない危険をはらむ諸刃の剣ではあるが、発動できる魔導の威力は絶大の一言。純粋概念はアカリがこの世界に来てから得た唯一最大の武器だ。

　大抵のことならば切り抜けられる手段に出た不具合は、少なからずアカリを不安にさせていた。

「どうにかして使えるようになりたいけど──」

「無駄な努力はやめておけ」

　スプリングが跳ねる勢いでソファーに座りこんで愚痴ると、突然、声がかけられた。

　他に人などいなかったはずだ。アカリはぎょっとして声のしたほうへと振り向く。

　狭いながらも趣のある調度品の置かれた部屋の壁際。扉が開いた気配もなかったというのに、いつの間にそこにいたのか、一人の女性が立っていた。

　赤黒いショートカットに、アカリよりは頭一個分ほど高い身長。なにをするでもなく佇んでいるだけで、背筋がざわりとする雰囲気を身に っている。

　 『 』。

　生きた伝説。史上最多の禁忌殺しの処刑人。気配なき に、アカリは慌てて腕組みを解いて敵意で目を尖らせる。

「な、なに、いきなり。なんの用か知らないけど、部屋に入るならノックくらいしてくれないかな」

「思春期か。これだからガキは面倒だ」

「ししゅ──!? 　一般礼儀の話だけどッ？」

「一般礼儀」

　 がアカリの反抗心を気に留めるはずもなく、バカにした態度で単語だけおうむ返しにする。

　彼女の態度は常に無礼そのものだ。思春期が一番されたくない反応にアカリが反抗期そのままの顔になる。

「ガキが都合よく礼儀を語るな。一般のなんたるかも知らん異世界人が」

「誘拐してきた人間に一般を語られたくないよーだ」

「どっちにしても、誘拐した相手に気を遣う必要性も感じんな」

　アカリの怒りなどどこ吹く風、 は会話を続ける。

「それよりもお前、さっき魔導を使おうとしていただろう」

「だったら？」

　アカリはさっと指をかばう。

　数日前、逃亡していたアカリは に確保され、ここ聖地に連れてこられた。その時に魔導を発動させようとし、目の前にいる女性に人差し指を折られたのは記憶に新しい。

　あの痛みは、少しトラウマになっている。何度も時間を繰り返しているといっても、日本育ちのアカリは痛みや恐怖を克服しているわけではない。特にメノウに殺される時はまったく痛みを感じないので、痛みに慣れる機会は少なかった。

「ていうか、のぞき見？　趣味わっるぅ。さすがモモちゃんの育て親だね」

「モモの悪癖は生まれつきだ。私のせいにするな。むしろあれの行状に原因があるとすればメノウのほうだろう。不肖の弟子の割に、他人をたぶらかすことだけは一級品だからな。あればかりは私もかなわん」



　いわれない中傷に、さしもの も不愉快そうな色を浮かべる。モモの制御の利かなさに手を焼いた思い出でもあるのかもしれない。

「なんにしても、ここで魔導を使おうとするのは無駄だからやめておけ。聖地は魔導結界でできていてな。普通の魔導ならともかく、純粋概念の魔導は、大きく制限されている。この大聖堂は特に、内側のものを閉じ込める性質が強い。そこの窓も、ガラスに見えるだろうが結界の一部だ。中から外は見えても外から中は見えん」

「え、そうなの？　ていうか、純粋概念の魔導が、制限って……？」

「ああ。特に原罪概念か原色概念を押さえるための魔導結界だ。生命維持か活動機構が魔導で成り立っている魔物と魔導兵の類は、聖地に入ることすらできん。入った瞬間、死ぬからな」

「魔物とか魔導兵とかは知らないけど……純粋概念って、すごく強い魔導でしょ？　封印とかできないものだってメノウちゃんが言ってた覚えがあるんだけど」

「あいつは大聖堂には入ったことがないから、ここの事情は知らないだけだ。それに、よく思い出せ。お前の魔導が機能しなかったのは、ここが初めてではないはずだ」

「ええっと……」

　記憶を探ってみれば、心当たりはないでもない。

　純粋概念は強力な魔導だ。効果も出力も他の魔導を圧倒するが、アカリの魔導が正常に作用しなかったことは何度かある。

　古都ガルムでの戦いや を相手にした時など、他の純粋概念と相殺し合った時だ。いまの状態とは話が違う。

「純粋概念のぶつかり合いでしょ？　ぜんぜん、いまとは違うじゃん」

　アカリの言葉を聞いた は、ぱっくりと口を開けて笑う。

「ああ、そうだな。変わらないんだよ」

　アカリの言葉を肯定しながら、矛盾することを言う。

　アカリは相手の意図がつかめないまま、反発心で思いついたことを話す。

「純粋概念が封印できるなら、私が復活することもできないんじゃない？　それだったら、おかしいじゃん。塩の剣なんて使わなくても、ここで殺しちゃえばいいんだし」

「制限されてもまったく使えないわけではないからな。自動で展開される【回帰】くらいは発動するだろうが、それも効率が落ちるだろう。試してみるか？」

　 が短剣を取り出した。抜き身の刃物を前に、アカリはまさかと腕で体をかばう。

　どうやら冗談だったようで、 はあっさりと短剣を納めた。

「本当ならばここで死んだほうがお前のためであるとすら、私は思うが……別にお前のために行動してやる義理もない。お前については、 として暴走させなければ意味がないからな」

「……それ、なんのためなの？」

　 として暴走させる。アカリのような異世界人が持つ純粋概念を暴走させれば、下手をすれば大陸規模の被害が出る。南の港町で遭遇した『 』など、その最たる例だ。

　それなのになぜわざわざ、リスクのある手段を選ぶのか、理解できない。

「それに、なんであなたにもループの記憶があるの？」

　 は答えなかった。代わりに、脈絡のない質問を投げかける。

「トキトウ・アカリ。お前は、自分の世界に帰りたいか？」

「日本に？　別に帰りたくないよ、あんなとこ」

「なぜだ」

「だって、帰ってもメノウちゃんはいないもん」

　突然の質問に戸惑いつつも、正直に返答する。

　日本から来たアカリだが、いまさら帰りたいと思っていない。なにせいまのアカリは純粋概念【時】の魔導を使いすぎたために、日本での記憶がほとんど欠落している。そのために故郷である日本への執着心はなくなっている。

　いまのアカリを支えているのは、この世界で出会っては繰り返した、メノウとの旅の記憶だ。

　それに加えて にここへ連れてこられる前、日本へ帰るための犠牲の多さを聞いてしまった。

　多くの人々を に、文明を枯渇させかねないほどの導力を消費し、大陸の一部を削るほどの魔導陣を創り上げることで初めて可能となる、大規模世界魔導。異世界送還の儀式だ。

　いくらメノウ第一のアカリでも、世界を滅ぼすといっても過言ではないほどの犠牲を出す気はない。そもそもメノウがこの世界にいるのだ。大きな被害を出す意味がない。

「ならば、意図せずにかけがえのない友人と世界を隔てて離れ離れになったら、どうする？」

「メノウちゃんと？」

「……別に誰でもいい。普通に暮らしているだけだったのに、突然、友人と引き裂かれたらどうするかと聞いている」

「んー……」

　改めて腕を組んで黙考する。

　もしもメノウと、理不尽に離れ離れになったら。

「一緒の世界にいられる方法を探す、かな」

　一生をかけて、再会の手段を探るだろう。あるかないかは問題ではない。ないかもしれないという可能性は、再びメノウと出会うことを諦める理由にはならない。

　アカリの答えを聞いた は、心底、嫌そうに口元を めた。

「……お前らは、本当に執念深い」

「……なんの話？」

「ただの保険だ。お前がいま知ってもわかるはずもないし、あとで合点しようが……その時は、私の損にはならない。そういう類の話をしている」

「意味わかんない」

「わからないのは、お前がバカだからだ。なぜと考えようともしない。自分の考えを変えようともしない。だから何度も同じことを繰り返すことになる」

　親や教師でもあるまいに、ぐさぐさと刺してくる言葉がいちいち説教がましい。

　なぜ誘拐された先で、誘拐犯に説教をされなければならないのか。 を膨らませたアカリは、ぷいっとそっぽを向く。

　逸らした視線の先には、偶然にもバルコニーがあった。

　ふっと、唇がほころんだ。

　日が沈んだ時間。軟禁された部屋。待遇だけは悪くない状況。

　期せずして、アカリが召喚されたばかりの状況と少し似ている。

「来ると思っているのか？」

　目ざとくアカリの表情の変化を見て取ったらしい。誰がという主語はないが、誰のことを示しているのかは明白だ。

　鋭く急所をえぐりこんできた問いだ。アカリは の問いに、言葉を詰まらせる。

「それ、は……」

　来るとも来ないとも答えることができずに、語尾がさまようままになる。

　メノウにどうしてほしいのか、自分がどうなりたいのか、いまのアカリには自分の指針がわかっていなかった。

　メノウが来たら、 『 』との対面は不可避である。

　そうすれば、どうなるか。

　いやというほど、アカリは思い知らされている。アカリの目の前で、メノウが 『 』に殺されたことが、何度あったか。メノウでは に勝てない。アカリにとって何度も経験した事実であり、覆らなかった結末だ。

　ならばメノウが と対立した今回はもうダメだと諦め、【回帰】すればいいのか。

　それも一つの答えだ。

　だが、とためらう心があった。

　アカリはすでに、日本の記憶をほとんど消費している。世界の時間を巻き戻して召喚された時間軸まで戻る脅威の魔導【世界回帰】は、多くの記憶を費やすことになる。もう一度巻き戻した場合、この異世界に来てからの記憶──つまり、メノウとの思い出がなくなる。

　それには強い抵抗があった。

　そして、さらにもう一つ。

「ここに来る前に、メノウと話していたな」

　びくり、とアカリの肩が震えた。

　メノウとの会話の最後に、彼女は約束してくれた。迎えに来てくれる、と。だからメノウは来る。アカリを殺しに、来てくれる。あの時のメノウの目を見て、止めようもないことはわかった。

　穏やかで、やさしく、それでも張り詰めた決意にあふれていた瞳は惚れ惚れするほどに綺麗で、触れば砕けてしまいそうなほど儚かった。

　 『 』に連れ去られるアカリに、メノウは「いい子で待ってなさいよ」と言った。

　自分は「待っているからね」と答えた。

　あの時に、自分は「来ないで」というべきだった。メノウに生きてほしいのならば、アカリはただ に殺されるのを待てばいい。アカリが死ねばメノウが殺される理由がなくなる。

　だからメノウを助けたいだけならば、アカリは 『 』に殺されればいいのだ。

　なのにどうしてメノウを求めてしまったのか、その場面を見てもいなかった が無遠慮な言葉で掘り返す。

「よかったな、大切な友達に自分のやっていることを理解してもらえて。いままで自分一人でやってきたことを認めてもらえて、嬉しかっただろう？　一人で孤独に浸るよりも、繰り返した時間を理解してもらえた瞬間は快感だっただろうな」

　アカリの肩に、優しげな仕草で手を置く。

　肌が粟立った。なにをされたわけでもないのに、刃物で脅されるよりもはるかに恐ろしさが勝った。

　 の言う通りだ。

　何度もループをしていることにメノウが気づいてくれた時、アカリは嬉しかったのだ。

「別にいいぞ。時間回帰をしても。お前は自分を理解してくれた友人を、消し去ることになるだろうがな」

　いま時間回帰をすれば、アカリのことを理解してくれたメノウとは、永遠に出会えなくなる。

「今回、せっかく奇跡的にも、メノウにわかってもらえたのになぁ」

　自分でも自覚していない恐怖を掘りだされる。ゆるやかに語られる声が耳に入って、脳内に絡みつく。

「お前の努力を知ってくれたメノウを、消し去れるか？」

　アカリは茫然と目を見開く。

　理解してしまった。

　いまの をアカリに言うために、彼女はあの時にメノウとの別れの時間をつくったのだ。

「……悪魔」

「くはっ」

　 がぱっくりと口を開く。彼女が大きく開いた口の からのぞく闇は、虚無につながる無間地獄に見えた。

「私程度が悪魔など、生ぬるいことを言うな。お前は繰り返してきた数だけ、メノウを殺してきたんだ。時に私に殺させ、時にオーウェルに殺させ、時に他の死因で殺させ、幾度となく世界を消費してきた。メノウだけではなく、大陸に住まう全員の未来を、お前は一人のわがままで じ曲げてここにいる」

　 の手がアカリの肩から離れる。わずかに残った体温が、やけにべったりへばりついたままになる。温かい血が布に染みこむように、じわじわと残り続けて広がっていく。

「すごいなぁ、トキトウ・アカリ。お前がくるわせた人生の数は、私が殺してきた人数なんて目じゃないぞ。悪人として、尊敬するよ」

　茫然とするアカリを置いて、 は立ち去った。

　アカリへの保険を済ませた 『 』は大聖堂の廊下を歩いていた。

「あれだけ言っておけば、土壇場で【世界回帰】を使うこともないだろうな」

　 にとっても、アカリの純粋概念は厄介だ。自分の時間を【回帰】させての復活により物理的な手段での殺害が意味をなさないことは当然として、空間にも干渉する【時】の魔導は、多岐にわたる効果を している。いざとなればすべてをひっくり返せる魔導を となるまで振るえ続けるのだ。

　物理的な拘束が意味をなさないアカリをひとところにとどめるためには、メノウという手札を使って精神的に縛るのが一番だった。

「これだから能力だけのガキは扱いやすい」

　固執しているものがはっきりしている分、誘導も難しくない。

　執着の大きさは、愛情の過多などではない。費やした努力、繰り返した時間、重なる痛み。有形無形に関わらず、かけたものが多ければ多くなるほどに情念は大きくなる。自分を押しつぶすほどの大きさになっても、捨てきれないほどに手に吸い付いて離れない。

　アカリにとって、メノウが助かる道かメノウに殺される道か、どちらも選ばせずに苦悩させることこそが、歩む道を止める重しとなる。

「いっそ吹っ切れれば、楽なのだがな」

　そんなことをさせないために、選択肢を用意したのだ。

　こつこつと階段を下りる。喧騒のない建物は、隠そうとしなければ足音がよく響く。

　聖地の大聖堂。

　大陸にある信仰の中心地ともいわれる建物の内部は極端に人が少ない。魔導で構成されている関係上、物理的な整備、維持のための人員が必要ない。秘匿事項が多い大聖堂内部には、口が堅い聖職者か【 】の関係者ぐらいしかいないのだ。

　がらんどうな は、廃墟を思わせる。ひとかけらも朽ちた場所なく美しいままだろうと、人のぬくもりのない人工物は途端に冷ややかな顔を見せる。

　外部からはなにをしているのか、まったくわからない施設だ。結界に阻まれ入れない者たちによりさまざまな噂話がたてられている。

　 く、大聖堂には聖地維持のための儀式場がある。

　曰く、大聖堂の奥の院には教典に記される『主』がおわせられる。

　曰く、大聖堂では意思決定機関としての権力者たち【 】が集まる。

　根も葉もない噂話が発祥だろうに、意外と核心をついていることもあるから侮れない。誰もが秘密を守れるわけではないということか、あてずっぽうの陰謀論でも数打てば当たるということなのか。

　ただ、真実をすべて知る人間がごく限られているのは事実だった。

　大聖堂の内部を見れば、妄想をたくましくしていた人間のほとんどは愕然とするだろう。

　階段を下りた は、アカリを隔離している北塔から大聖堂の中心線を貫く身廊に出た。

　高い天井に、まっすぐ伸びる廊下。形だけは聖堂ではあるものの、真っ先に目につくものは決定的におかしかった。

　大聖堂の中には、駅があった。

　小さな田舎町にでもありそうな真っ白いプラットホームが、大聖堂の両翼として広がる南翼廊から北翼廊を占拠して貫いている。中央交差塔にある採光部から取り入れている光を浴びるホームは、場違いだというのに堂々と存在していた。

　身廊を抜けた奥にあるべき礼拝堂と内陣部の様子は、 の位置から見通せない。大聖堂の中に、こんな駅があるという以上に下らないものが存在することを知っているが、参拝する気は一切なかった。

　 は大聖堂にある駅ホームに上がる。ホーム中央にある駅舎の中で待機している神官が、 の姿に気がつきぺこりと頭を下げた。

　白い 積みで造られたプラットホームは幅十メートル、長さ百メートルほど。木製のベンチが点々と置かれ、中央部には二階建ての駅宿舎まである。線路側の縁の手前には黄色い線が引かれているのがやけに平凡で、大聖堂の中に列車の停留所があるなどという非現実感を浮き彫りにさせていた。

　一面一線の特殊な駅に、車両の姿はない。大聖堂という屋内にあるレールの先は、外につながっていない。翼廊の出入り口となる部分に、金色に輝く円盤状の導力光の扉へと吸い込まれるようにして続いていた。

　古代文明期から存続する大聖堂が隠匿する三つの内の一つ──『龍門』。

　金色に輝く扉を通過することで物質を導力体へと組み替えて、導力の経路を経て任意の場所で再構成する機能を持つ古代遺物。簡単にいえば、地脈のつながる場所ならばどこへでも【転移】を可能とする大聖堂の秘儀の要だ。

　 は駅舎の窓を軽くノックする。眼鏡をかけた気弱そうな神官が扉から顔をのぞかせた。

「フーズヤード。私は一旦、大聖堂を出る。私の修道院までの道を頼む」

「は、はい、少し待ってください」

　二十歳過ぎに見える彼女は、まだ若いというのに大聖堂の出入りを一手に任されている特殊な立ち位置にいる人物である。

　大聖堂には物理的な入り口はなく、大司教の裁可のもと、ホーム駅舎内にいる彼女が『龍門』を操り【転移】で出入場を管理している。彼女がいなければ大聖堂の出入りもままならない。

　フーズヤードが『龍門』への出入り口を用意するための魔導操作を進めているのを横目にベンチに腰掛ける。 が来た身廊とは逆、奥の内陣の方向から近づいてくる人物がいた。

　大聖堂に出入りする数少ない一人を見て眉を上げる。老いさらばえて縮んだ身長に、かつては何色だったかもわからぬほどの色を失った白髪。見るからに力ない老女だというのに、彼女の瞳に宿る だけは、まったく衰えている様子はない。壮麗な司教服に身を包む彼女が現れた瞬間、フーズヤードなどはぴゃっと悲鳴を上げて顔をひっこめた。

　大司教エルカミ。【 】の中でも珍しい、 で表立った立場にいる【魔法使い】だ。

　彼女もまた聖地のシンボルである大聖堂の守っているものと役割を知る者だ。

「立て」

　一言目から、命令だ。

　特に気を悪くするでもなく、立ちあがる。

　世界の身分は三つに分けられているが、【 】はその にいる特殊な集団だ。どこにも分類することが不可能になった人種を【 】と認定しているといっても過言ではない。

　彼らの本質は力の大小ではなく性質にある。共通する自らの特殊性ゆえに表舞台に立つことはせず、あるものは隠遁し、あるものは暗躍し、あるものは放浪している。

　その中でも の大司教という立場にいるエルカミは特殊だ。

　人前で矢面に立てる【 】は稀少である。立場も上、年齢も上、実力も上。命令する道理がエルカミにはあり、 には無為に逆らう理由もない。

「部下から報告があった。モモと名乗る神官補佐が、近くの修道院に宿泊を申し出たそうだ」

「ほう」

　モモが帰ってきたと聞いても特に感慨はない。むしろ の一員であるとはいえ、よくぞ大司教であるエルカミが下っ端でしかないモモのことなど把握していたものだと感心する。

「それがどうした？」

「宿泊を申し出た神官は本人で間違いなさそうだ。連れがいるが、メノウという神官ではなくアーシュナ・グリザリカを名乗っている」

「そうか」

　教典で通信ができる神官にとって、情報の共有は基本だ。通信魔導があるからこそ、絶対数の少ない が他の優位に立てている面は大きい。

　モモが聖地に来るタイミングとしては妥当だ。同行者がアーシュナ・グリザリカとなると、メノウとは別行動を選んだのだろう。意図していることは、大体つかめる。

　どうせモモが考えていることなど、メノウをサポートすること一色に染まっている。

　だがエルカミが気にかけているのはモモではなかった。

「『 』。貴様の考えを教えろ。このタイミングでグリザリカの末姫が来たのには、どういう意味がある」

　的外れな疑問とも言えなかった。モモではなく、アーシュナのことを問いかけてきたエルカミの も理解できる。

　聖地からもっとも遠い大国であるグリザリカ王国は、制御が かない要素が多い。地理的にも、歴史的にも。特にグリザリカ王家にいる【 】である【防人】のあり方は、おぞましさゆえに嫌悪感が募る。

　多かれ少なかれ【 】は異常者だが、グリザリカの【防人】は東部未開拓領域の浸食を抑えるために必要不可欠である。その事実が他の【 】たちとの勢力図を複雑なものとしていた。

　だが【 】の立ち回りについては、 の興味の埒外だ。

「家出娘を迎えるのにタイミングを合わせたんだろう。グリザリカの【防人】は『姫騎士』にご執心のようだからな」

「本当にそれだけか？」

「グリザリカは動かん。少なくとも、まだな」

　 の返答を聞いてもエルカミの声からは は い去られない。不安なのだろう。エルカミは、上に昇りつめればつめるほど他者を信用できなくなった典型だ。【 】となって以来、配下に自分の正体が知られないかと四六時中不安が付きまとい、同じ立場の【 】からは寝首をかかれないかという恐怖にさいなまれている。

「貴様の弟子である『 』が、アーシュナ・グリザリカに化けている可能性は？　メノウとやらがトキトウ・アカリを取り返しにくる恐れがあるというのは、お前の報告だったはずだ。時間回帰が繰り返される中、少なくない回数、 を裏切っていたのだろう？」

「仮にも私の弟子が、本気でのこのこと聖地まで歩いてくるバカだとは思いたくないな」

　今度こそ見当はずれな意見に、 の声から興味の色が抜け落ちる。

「一応、顔でもつねっておけ。導力迷彩の有無は、それでわかる。十中八九、メノウではなくアーシュナ・グリザリカ本人だろうがな」

　エルカミは優れた魔導行使者だが、 が策略家からほど遠いことを承知している。だからこそ に質問を重ねている。

「……『主』のご帰還に関わることだ。【時】の件に関しては極力、不確定要素を排除しておきたい。グリザリカの連中は無論、他の小物どもにもだ」

「それは、そうだな」

『主』の帰還。

　それが【時】の純粋概念の処理を複雑にしている原因だ。『主』に関わることさえなければ、トキトウ・アカリなど最初の一回目でメノウともども が殺していた。

「奇遇なことに『主』のご帰還とやらを成功させることに関しては、私も大賛成だ」

「大陸の情勢が変わる、千年に一度の機会だぞ。 な要素にも邪魔などされたくない」

「奇跡的なことに、私も同じ気持ちだよ」

　大司教エルカミと 『 』の気持ちが通じ合ったのなど、いつ以来か。もしかしたら出会ってから初めてかもしれない快挙だというのに、なぜか老婆の目つきがどんどん厳しいものとなる。

「もしお前が、ここに潜入するとしたらどうする？」

「それは大聖堂の結界を無効化して内部に入り、あろうことか北塔にいるトキトウ・アカリを確保して脱出までしてみせるということか？」

「そうだ」

「不可能だな。私なら単独での潜入は諦める」

　ぴくり、と眉が動く。

「……貴様でも、不可能だと認めるのか。大聖堂の構造も出入りの仕組みも承知していて、なお？」

「仕組みを知っているからこそ、無理だと言えるんだよ」

　手近な壁を、こんこんと軽くたたく。

「そもそも聖地は、厳密にいえば町ですらない。巨大な魔導結界だ。特に大聖堂は入場制限が厳しい」

　駅舎に引っ込んでいる気弱な神官を目で示す。物理的な出入り口がない。出入りだけで、短距離とはいえ転移の魔導陣を使っているのだ。外からはいくつか窓ガラスのように見える場所もあるが、そこですら開閉不能な結界となっている。まさしく、ネズミ一匹通さない金城だ。

「許可がないと入ることすらできないというのに、どうしろと？」

「やりようはいくらでもあるというのが、貴様の信条ではないのか？　なにより内通者をつくろうとはしないのか？」

「ここの侵入に必要な内通者がいるとしたら、そうだな」

　 はエルカミと視線を合わせる。

「お前と同等の立場を できたら、ようやく に値する」

　自分が疑われたとでも思ったのか、 をにらみつけるエルカミの目もとの が深くなる。

　大司教であるエルカミを籠絡する。非現実的な方法だ。彼女の立場で侵入者に協力するメリットはない。

「他にないのか？　まさか弟子をかばい立てしているのではあるまいな」

「私が、あいつを？」

　その言葉は予想外だとばかりに、目を丸くする。

「それは思いつかなかった。さすがは大司教になるだけあって、頭がやわらかいな。発想の泉が豊かでうらやましい。想像力をたくましくさせるのが長生きの か？」

「やかましいッ！」

　一喝。びりびりとした怒鳴り声が空気を震わせる。

「青二才が、生意気な口を くなよ。貴様が き使い手、いくらでも代わりはいるのだぞ！　本来ならば大聖堂に入れるほどの魔導者でもなかろうに、 な口ばかり利きおってからにッ」

「知っているさ、自分の程度など」

「ならば身を控えろっ！」

　 は特別な魔導者ではない。【 】の特異性には遠く ばない。目の前の老女と正面から戦えば、あっという間に敗北するだろう。

「トキトウ・アカリの件に関しては貴様の任だと心得ろ。しくじるなよ。私は礼拝堂を守護することに集中する」

　一方的に言い残して、立ち去った。

　相変わらずである。間違いなく大陸屈指の実力者だというのに、どうしてもっと余裕のある性格にならなかったのか。怒りと不信をまき散らす老婆を見送る。

「……『主』と【 】どもとの折衝のストレスか」

　エルカミも【 】の一員であるというのに、 に常識が残っているせいで難儀なことである。

　さて、と は先ほどの会話を する。

　大聖堂への侵入。もし 『 』だったら無理だ。よくも悪くも、彼女の存在は【 】に知られすぎている。エルカミをはじめとした彼らに全力で警戒されては、話にならない。

　だが、メノウならば。

　まだ【 】に警戒されるほどの功績を挙げていない彼女ならば。

「まあ、できるだろう」

　人にはそれぞれ立ち位置がある。 が『 』のままではできないことも、『 』であるメノウならばできることもある。

　その事実を報告するつもりも、対処をするつもりもなかった。

　禁忌を犯す人間を止めることはしない。予防は彼女の役目ではないのだ。

　止まることなく禁忌になったものを、世界から切除する。

　それに徹したからこそ、 は伝説になった。

　メノウが を裏切って、この大聖堂に侵入することがあれば切り捨てる。もしも万が一、ここに来なければメノウの寿命が延びることになる。

　それだけのことを難しく考える必要はない。

　会話が終わったのを見計らってか、フーズヤードが駅舎から顔を出す。

「あのぉ、出口ができたので、側面口からどうぞ」

「ああ、助かる」

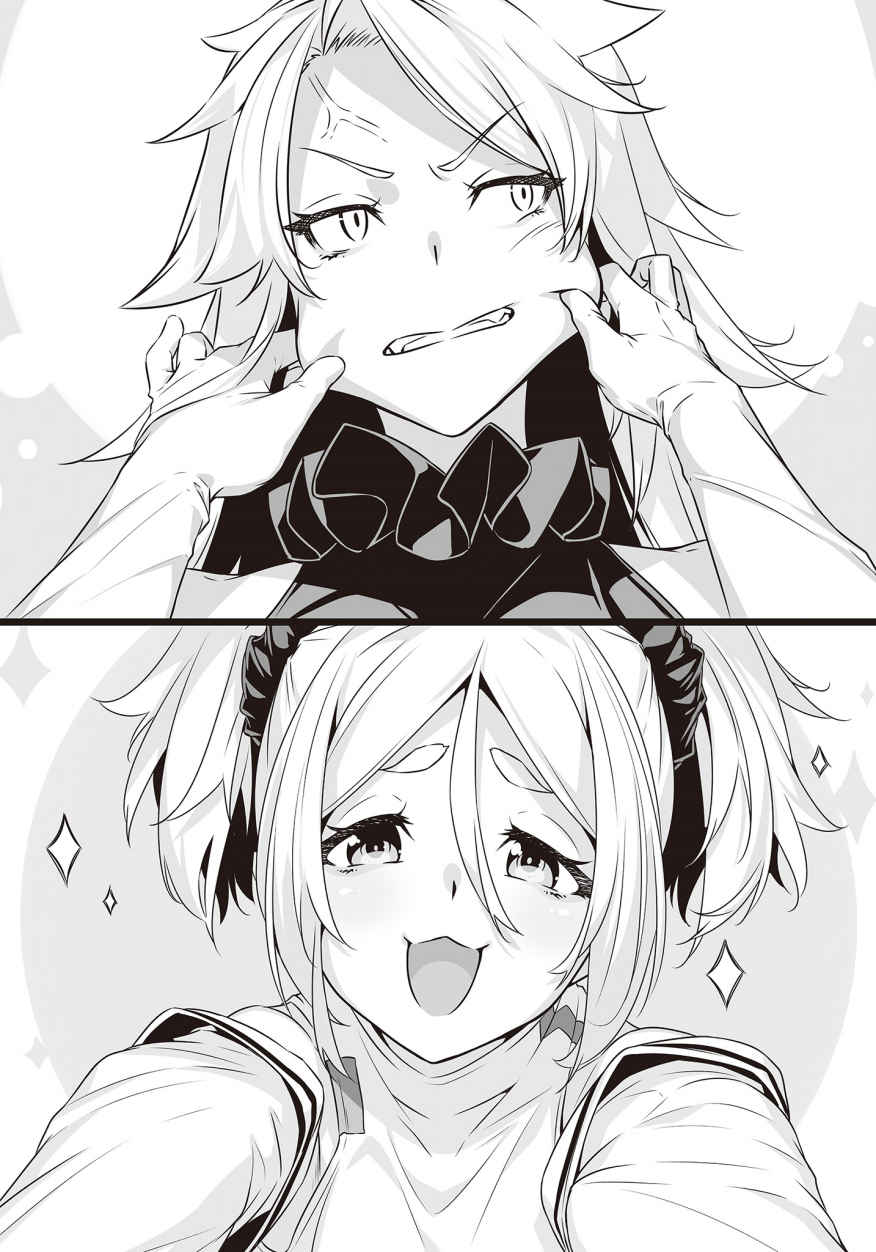
　当然を当然として、 『 』は先へと進んだ。

　高貴にして 、姫として生まれながら果敢な騎士として育ったアーシュナのすべらかな頰が、むにーっと引っ張られていた。

　女性としては長身の彼女の頰を下から引っ張るのは、 なほどに小柄なモモだ。修道院の宿泊の際になぜか『連れの女性の頰を引っ張ってください』と要求されたモモは、仕方ないなぁとわざとらしいほどわざとらしく前置きし、ここ数日一番の笑顔で嬉々としてアーシュナの頰を引っ張っていた。

「ほーら、これでいいですかー」

　にっこにこの上機嫌である。手を伸ばして、アーシュナの頰を指先でつまんで伸ばす彼女はこの上なく楽しそうだ。



　納得いかないのはアーシュナのほうである。心の広い彼女にしても、意味もわからず頰をつねられる扱いはご不満らしい。腕組みをして、むっつりとしている様には言い表せない威圧感がある。

「あ、ああ。はい。どうぞ……」

　教典魔導で誰かと通信をしていた修道院の院長は非常に気まずそうだ。藍色の神官服を う司祭である彼女は、無言で不機嫌さをまき散らすアーシュナを気にしながら中に案内する。

　食堂とシャワー室に、二階に用意された個室。

　宿泊に使う場所を案内されたモモは自分の体をざっと見下ろす。

　アーシュナとの追いかけっこのおかげで、神官服の白服が台無しなほど泥だらけである。それでなくとも雨に打たれて体が冷えている。

「シャワーついでに服を洗いたいので、 と桶に入った水をもらえますか？」

「お、そうだな、モモ。ついでに私の服もお願いしていいか？」

「それとですけど」

　モモは笑顔のままアーシュナを指さす。

「こいつとは、絶対に部屋を分けてください」

　修道院の基本は、自給自足。自分でやれ、と態度で示した。

　ぱんっ、と皺を伸ばした洗濯物をロープにぶら下げる。

　上下一 ぎの神官服とタイツに、白手袋と下着。モモの服装は基本的に白に統一してあるため、汚れが目立たなくなるまで洗濯するのは大変だったが合格だろう。おしゃれに清潔感は基本中の基本である。干した衣服に合格だと自己採点を送る。

「ちょっとましになりましたね」

　シャワーを浴びて旅の汚れを落としたモモは、替えの神官服に着替えていた。

　まだ少し髪が濡れているせいか、空気が動くとひんやりとした冷気を感じる。ベッドに腰を下ろす。少し迷ったが、まだ日も落ちていない時間なので荷物からタイツを取り出す。

　座った姿勢で片足ずつ通し、皺にならないよう丁寧に伸ばす。しゅるりと衣擦れの音を立てながら のあたりまで いたところで立ち上がり、腰元まで引っ掛かりをつくらないために両手で整えながら引き上げ、手を抜いた。

　ぱちん、とタイツが肌になじむ音がする。足を前に伸ばして網目にムラがないことを確認。これならいつメノウの前に出ても恥ずかしくないとおしゃれチェックを済ませる。

　白手袋は戦闘時の保護のために着用している。こちらはいいかと怠惰に任せた。

　聖地は目前だ。ここに来た時点で、モモはメノウから任された役割を最低限、達している。

　メノウはアカリを迎える準備をすると言った。処刑人であるモモの先輩が迎えに行くというのならば、やることは一つだ。

　メノウの予想では、アカリを連れ去った は彼女を 化させてから殺そうとしているとのことだった。

　メノウの想像が正しければ、【時】の純粋概念を時間魔導として世界に落としこもうとしている。だからアカリがアカリでなくなる前に、自分の手で終わらせるべく行動を始めた。

　メノウは、自分の手でアカリを殺そうとしている。

　メノウが決めたならば、モモは従うまでだ。

「先輩から、任されたのは──」

　自分の役割を確認しようとした独り言を み む。

　ぎしぎしと床板の む音が耳に届いた。悠然とした足取りに隠れる気持ちがこれっぽっちも感じられない。誰が近づいて来たのか、それだけで理解する。

　こんこんこん、と儀礼だけは外さず三回叩かれるノック。

「モモ、身支度は終わったか」

「……どーぞ」

　アーシュナだ。糸鋸を使う可能性がぐっと上がったので、やっぱり白手袋は着用しようと荷物から取り出す。

　がちゃりと扉を開いて入ってきた。遺憾の意を表明すべく、モモは の瞳をジト目にして送る。

「なんの用ですか？」

「なに。少し話をしようと思っただけだ」

　手袋をはめながらの質問に やかな返答をしたアーシュナが、ずうずうしくもベッドに腰かける。

「ここのような修道院で育った少女の一部が神官となって各地に配置される、というわけか」

「 ちすぎもどうかと思いますよ。現地で育てる人のほうが多いです」

　わざわざ聖地周辺の修道院に連れてくるのは、魔導的な素養が高いか、なにか特殊な事情があるかだ。

「ふむ……モモは の出だろう？」

　ぴたりと動きが止まる。

「……そうですけど、言いましたっけ？」

「見ればわかる。モモは根本的なところで育ちがいいからな。五歳くらいまでは、 の親元で育ったはずだ」

「ずーいぶんと鋭いことで」

　 に皺を刻む。分析されたのが不愉快だった。その上、当たっているのが気分の悪さを増加させている。

　アーシュナの推測は的を射ている。モモの生まれは であり、そこから あって に預けられた。生まれついての膨大な導力量もあって、高い魔導適性を持ちながらも精神的に不安定で扱いにくい子供だったモモの行き着いた先が 『 』の修道院だった。

「出身が だからって、どうだとは思いませんけどね」

「そうか？　生まれは、育ちと同程度には重要な要素だぞ。他の誰でもない、自分自身が己の生まれに関心を寄せて意味を見出すからな」

　 の生まれ。まさしく姫として生まれ育ったアーシュナは腕を組んで、不敵に笑う。

「そういう意味だと興味深いのはメノウだな。メノウは、どこ出身なんだ？」

「先輩は のはずですよ」

「そうか？」

　アーシュナの予想と違ったのか、意外だという感情が含まれた声だった。

　事実メノウの出身は だ。

　モモはかつてメノウの出自を調べたことがある。 によって跡形もなくなった村で、唯一生き残った少女がメノウだ。

「姫ちゃまの野生の勘だと、先輩はどこ出身だと思ったんですか」

「いや。メノウはどことなく──生まれながらの みたいな感じだ」

「はあ？」

　頭をかきながらのアーシュナの発言は、意味不明なものだった。

　 には女しかいない。神官となる の前段階である修道女の選出段階からして、女の孤児のみを選ぶ。縁戚関係がある人間もいない。婚姻自体はゼロではないが、誰かと籍を入れた時点で からは除外される。

　血縁で続く や、経済でつながる とは違う。 は他と利害がないからこそ聖職者であると認知されているのだ。

　それが生まれついての など、なにをバカなと しかけた台詞を呑み込んだ。

　モモが素養の高さで選ばれたのならば、メノウは特殊な事情ゆえに に育てられた。

　グリザリカ王国で大司教オーウェルの みにより起こった で、魂と精神が漂白された子供。それがメノウだ。

　記憶もなく人格もおぼろげな時点で 『 』に拾われたメノウは、生まれながらの といってもあながち間違いではない。

「……先輩は、他の人とは違いますから」

　 、メノウはどうしているのか。

　トキトウ・アカリのために 『 』に反旗を すことに決めたメノウのことを思う。

　もとより頼もしく理知的なメノウだが、彼女は今回、自分をすり減らす覚悟で動いている。

「なにをやろうとしているのかは知らないが──私の経験上、張り詰めすぎた人間は潰れるぞ」

「……そんなこと、言われなくてもわかっています」

　いまのメノウは無理に自分を切り詰めているが、それが間違っているわけではないのだ。

　聖地で相手どるのは 『 』だ。手札を知られ尽くしている相手。いくら警戒しても警戒し足りない。無理をしなければなにも達成できずに死んでおしまいだ。

　ならば、モモがすることは一つだ。

「先輩の支えになることは、なんでもやるのが私の役目です」

　アーシュナが、ふっと頰を める。

「愛されているな、メノウは」

「姫ちゃまとは格が違うので」

　自分たちがあの異世界人にできることはなんなのか。

　日が暮れ始めた田園の光景を目に、モモは いを巡らせた。

　天窓から夕暮れの灯りが降りそそぐプラットホーム。聖地の大聖堂内にある不可思議な停車駅の途切れた線路の端につながる『龍門』が波紋を立てる。

　金色の導力光に輝く二次元的な光の門から姿を現したのは、五両編成の列車だ。ゆっくりゆっくりとホームに滑り込んだ列車が停止し、客席のドアが開く。

　五両編成の特殊な列車を使用できる人間はごく限られている。大聖堂に入る権限を持つ者の要請があった時にだけ運行される特別列車から降りたのは、五十半ばの正装の男だ。ステッキと山高帽子をかぶっているせいか、高級感のある一部の隙もない服装が逆にうさんくささを助長している。

『盟主』カガルマ・ダルタロス。

　三つの身分制度に異を唱え、世界に名を かせた男だ。大陸的な犯罪者である彼を、駅舎に常駐している眼鏡の神官が出迎える。

「ようこそ、カガルマ様ですね」

「ここに来るのも久しぶりだよ。二度と来たくはなかったが……駅の管理者は変わったのだね」

「はい、先代から『龍門』を託されたフーズヤードです。どうぞ、よろしくお願いします。今回はお連れ様がいらっしゃるそうですが……」

「ああ、そうなんだよ。自慢の娘でね。是非とも、ここへと連れて来たかったのだよ」

　そのタイミングで、しずしずと降車したのは着物姿の少女だ。彼女へとフーズヤードは笑顔を向ける。

「ようこそ、大聖堂へ。お名前をうかがってもよろしいですか？」

　入場者は逐一確認するのが決まりだ。規則に従った質問に、少女は気を悪くした様子もなくおっとりと微笑んだ。

「わたくしはマノン・リベールと申します」

「カガルマ様と、マノン様ですね。承知しました。中へどうぞー。北塔はなんだかよく知りませんけど使用中とのことで、南塔での宿泊をお願いします」

「はい、わかりました。しかし──」

　フーズヤードの案内を聞いたマノンは自分の乗って来た列車をちらりと興味深げに振り返る。

　普通の導力列車は地脈に沿って敷かれた線路で地中から導力を引き出し、列車に積んである導力機関と反応させて車輪を回す。

　だがこの列車は地上に された線路を走っていたのではない。途中で列車自体が導力体に変化して地中に沈み、龍脈そのものを潜航した。旅をすることに慣れている彼女にとっても、初めての経験だ。

「初めて乗りましたが、不思議な列車ですね」

「この列車ですか？」

　マノンが停車している列車に関心を寄せたのを見て、フーズヤードは眼鏡を光らせる。

「内装は現代のものですけど、古代文明期の遺失技術による列車です。走行時に導力体になることで龍脈に潜り、高速化が可能というすぐれものにして、古代遺物そのものですよ！　車体がそのまま残って運用されているのは、まず間違いなくこれだけです！」

「古代遺物……道理で、他とは違うと思いました」

　人類絶頂期に造られた品、古代遺物。小物ならばごくまれに発掘されることもあるが、現代まで駆動している乗車物となると聞いたこともないほどの貴重品だ。

　得意分野とあって饒舌になったフーズヤードの説明に、興味深げな相槌を打つ。

「導力体になることで龍脈軌道に乗って超高速化……導力体になる仕組みはあそこの光壁にあるとして、再構築や内部の乗客を守る仕組みはどうなっているんでしょうか」

「仕組みの解明は現在の魔導技術では難しいだろうね」

　よほど興味を引かれたのか、ぶつぶつと考察を始めた少女にカガルマが苦笑する。

　フーズヤードは嬉々として説明を始める。

「『龍門』も含めて、素晴らしい技術ですよね。私たちが地脈と呼んで利用している莫大な導力経路ですけど、古代文明期には一般的だったこの列車を通すための『線路』として整備された導力路という説もあるんですよ。夢が膨らみますよね」

「それは……初耳です。わたくしも勉強不足ですね」

　いまはなき古代の高度文明の一端を感じながら、大聖堂の南塔にある一室へと到着する。

「それでは、お帰りの際や大聖堂から出る場合は私にお申し付けください」

　一仕事終えたフーズヤードは、自分の仕事場である駅舎に戻った。

　彼女を見送った二人は、部屋に置かれた革張りの椅子に腰かける。

「【 】にはいつでも滞在できる権利が与えられている。ここも君の自由に使ってくれたまえ」

「ありがとうございました、カガルマ様。とても助かります」

　丁寧に頭を下げる。いつになく愛想のいいマノンに、カガルマはなぜか不満を浮かべた。

「人目もなくなった。もういいだろう。その顔は、やめてくれたまえ」

　顔をやめてくれ、と言われたマノンはことりと首を斜めにする。

「あら……そう？」

　口調が、変わった。

　空間が揺れて、マノンの顔が変化する。和装はそのままに、おっとりとした面立ちとはまた違う美貌が現れる。深い青色の三つ編みは、髪形はそのままに色素の薄い栗毛に。大人びた顔立ちを飾る瞳は、確固たる意志を感じさせる強さを持つ形へと。

　処刑人『 』。

　モモよりも一足早く、聖地の大聖堂に侵入したメノウは足を組む。

「改めて、協力感謝するわ、『盟主』」

「なに、君は旧友の弟子だ。気さくに『カガルマおじさん』とでも呼んでくれ」

「……遠慮しておくわ」

　距離の詰め方が、微妙に気持ち悪い。

　穏やかな口ぶりのまま彼をこき下ろしていたマノンの気持ちがちょっとわかってしまったメノウだった。

